
伝説の鬼ごっこ

岩崎星空羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

伝説の鬼ごっこ

【Zコード】

N6137D

【作者名】

岩崎星空羅

【あらすじ】

道栄高校に伝わる七不思議のひとつ…鬼伝説。さて、逃げ切れるのは誰でしょう？

「ふわあああ

んー。今日もいい天気

初めてまして！高川日菜です 道栄高校に通うぐく一般の高校1年生です。

学校でも、イジメはあるけど私はいじめられてないし、毎日楽しいです

でも、私のかよう学校の七不思議…。ひとつだけ怖いのがあるの。部活の先輩に聞いた怖い七不思議…。

職員室がある校舎の2Fトイレにある窓側から数えて2番目の鏡に時々映る鬼の面。

その鬼を見ると、食い殺されるつていう話…。

先生も数人いなくなつたつていう話しだし…、職員室のトイレには入らないようにしてたんだけどね…。

最近鬼が消えたらしいって…。それで私たち1年生が利用するトイレの鏡に出てくるようになつたとか…。

男子トイレか女子トイレかは明確じやないんだけど、最近学校を辞めたという高2の英語担当の先生が消息不明になつたんだつて…。

先輩たちがいる2Fのトイレにわざわざいくこともないし、もう高校生だから七不思議なんて通用しないから、別に気にしてなかつたんだけどね？

最近、隣のクラスの女の子が消えちゃつたの…。

幼馴染の、沢崎隼人に聞いたら、授業中にトイレに出てたまま帰つたこないから心配したんだけどサボつたんじやないかつてことで片付けられたんだけどやつぱり…まだ帰つてこないの。

「…オハヨー！」

「はよ。朝からハイテンションかよ、ついてけねえ。」

隼人と一緒に登校している。友達がいないんじゃないかつて思われるかもしないけど

この辺の地域に友達がないの。だから、仕方なく隼人と。でも隼人怖いって言われてるけど（女子の間じや）、もしかしたら…。

前中学のときに、痴漢にあつたんだ、夜。そのことを親に打ち明けられずに困つてたら、隼人が聞いてくれたの。それでちゃんと…つかまつたの、痴漢が。

帰り道とか部活でも待つてくれるし…。ちょっとひりかっこいいかもね。

「ひ、日菜！た、た…大変なことが…。」

帰り道隼人を待つていたら、猛烈な速さで隼人が帰ってきた拳句何かを言う。

「ど、どしたの？お、落ち着いて！」

「今日、岡田が帰ってきた。でもなんだか変で、自分の席に座つてぶつぶつ唱えてる。で、あいつと仲良かつたやつが心配で声をかけたらしいんだけどよ？そしたらそいつがおかしくなつて…。で、岡田は普通に戻つたつてわけ。で、仲良かつた井川が変になつたらそいつには近づくなよ？」

途中から変になつてるよ、隼人？

岡田つて言うのは、隼人のクラスメートで鬼に食われたつていう子。でも戻つてきたんだつたら安心

「…近づくなよ！？」

「う、うん。」

ようやく落ち着いた隼人とスクバを持って学校を出る。

「ココから悲劇なの…。」

電車に乗っていると、なんと井川さんがいたわ。おとなしそうに電車の席に座っている。そしてなんだか不気味な真っ黒な本を片手に隼人の言つたとおりにぶつぶつと何かを呟いてるの。

井川さんに気づいた隼人は私に小声で言つた。

「絶対近づくな？ 移動しようぜ、車両。」

「分かった。」

でも、なんとなくかわいそう。でも、好奇心をもつて近づいたら隼人に…。

私たちは2両ほどはなれた車両へと移動した。

ちょっと安心して隼人と話していると…。

なぜかさつき座っていた位置と同じ位置に井川さんが

。

普通、移動してきたときはドアの重い感じの音がなるじゃない？ その音が聞こえずに気が付いたら…。

しゃべっている隼人の横腹を軽くつつく。そして目線で合図して井川さんの存在を知らせる。

隼人に手を軽く引かれる。移動をしようとしたその瞬間。

私たちの最寄の駅まできた。

「降りよっか。」

そういうつて降りた。

プシューといつてドアが閉まる。よかつた、これで井川さ

。

たまたま後ろを振り返ると井川さんがいた。

相変わらず不気味な本を手に持ち、ぶつぶつ何かを唱えながら

。

本気で怖くなつた私は、歩くペースを速める。それに、気が付いてくれた隼人も早めてくれるんだけど…。

井川さんと距離が開かない

。

私は催眠術にかかつたかのように、ひたすら歩いた。

。

あと少しで家だつてところまで必死に。

家の前に着いた私たちはくるりと後ろを振り返る。

そこにさつきまでいたはずの井川さんの姿は見当たらなかつた。

「よかつたな。」

そういうて、私の頭をぽんぽんとなでる隼人。

なんだかカツブルつぽくて恥ずかしい。

「また明日も一緒に行つてくれるよね?」

無性に井川さんへの恐怖が募つた私は、聞いた。

「もちろんだよ。お前が変なやつにかかわらないためにな。」

翌朝、隼人と一緒に登校した私が最初に見たものは、ぶつぶつと何かを唱える沙織ちゃんだつた。

人だかりに聞くと、どうやら昨日井川さんに追いかけられたらしい。それから学校では変らしい。

話しかけると染る…。

怖い、未知のウイルスが近くに潜む恐怖…。どうしよう…。

「絶対に、沙織に近づかないこと!」

沙織ちゃんたちといつも一緒にいた人たちが声を荒げる。

何で? ?そんな簡単に友情捨てれるなんて…。

そして、沙織ちゃんを囲んでいた人たちの一人が呟いた。

「まるで…鬼ごっこみたい…。」

オニゴツコ

。 小さい頃やつた鬼ごっこを思い出す。
必死に鬼にならないように逃げたつけて、鬼は必死に人を追いかけたつけ。

本当だ、まるで鬼ごっこ…。

それで、この変な七不思議は、鬼ごっこと呼ばれた。

多分、鬼は影でやりと笑つていたんだろう。

私には

。

恐ろしくて笑えないことを笑う鬼たち

岡田さん、井川さん、沙織…。

何を考えてるの？

家に帰り携帯電話を開くとメールが10通近く入っていた。
多分迷惑メールだと思い開くとチエーンメール式のメールがたくさん入っていた。

件名はすべて『鬼ごっこのこと』だった。

内容は、

『鬼ごっこのことについて みんなが恐怖の鬼ごっこ。何回でも鬼になつちゃうらしいよ！！！これわ要注意ねッ！それから、鬼の目当ては鬼を増やすこと だから、気をつけよう！鬼は人間を食べたから僕を作つてゐらしいんだ！だから、物欲に負けるなあ！by 優実 -みんなに回してこの報告を広めようぜい！』

『優実… 同じクラスの優実はこういうオカルトが大好きつ子少女。すぐに調べるの。

多分今回も自分の時間や身を削つて調べたんだろうな…。
でも、最後の『物欲に負けるなあ！』ってどういうことだらつ…。
とにかく、優実の言うとおりに女子数人に回した。

「ねね、今度はるるかだつて！」

『るるかちゃん？物欲つて言つより、金欲に負けそつた女。正直言つてかかわりがたい人物。

名前が可愛いんだけど、ちょっと性格は危ないつて感じの子。
でもその、るるかちゃんがまさか…。

今日はたまたま隼人と帰れない日…。なんだかさびしいな。

と思いながら電車に揺られる。

意外に人影はなくて静まり返る車内。

やつと最寄り駅到着！つて思うと…田の前にはるるかちゃん…。

「…ナマイキヨ。ソロソロキヨテ。ニンゲンナンテムダヨ。」

片言の日本語を連発するるかちゃん。

最後に行つた人間なんか無駄よつていつ…言葉が怖い。耳から離れない…。

「…オニーナッテミナイ?タノシイワ。」

「な、ならないよーー目、覚ましてよーるるかちゃん!…!…」

すると、私の声がこだまする。

…あたりを見渡すといつもは並に人がいるはずのホームに人が見当たらない。私とるるかちゃんだけ。それに、電車が来ない。ハツとして前を振り返ると、包丁を振りかぶったるかちゃん。

「ちょ、やめてよ!」

後ろに下がる。包丁から目が離せない。右手に包丁を持ったるかちゃんの左手には不気味な本…。

ダンッ

フェンスにぶつかつた。もう後ろには下がれない。かと言つて包丁から目を放した隙にやられそうで怖い。

「鬼になつたら殺さないわ。」

「…え? ?」

相変わらず無表情で話し続けるるかちゃん。

「だから、あなたが鬼になつたら殺さない。」

究極の選択ね。

だから、みんな鬼になつてたんだ…。

「は、隼人ー! ! ! ! ! !」

叫ぶ、ただただ叫ぶ。隼人が助けに来てくれるんじやないかつて信じてる。

「じゃあ引き換え条件。」

「…え?」

「沢崎君にあんたの想いを伝えると死ぬつて言つのは?ただし、想いを伝えずに一生生きていよつて言つのはなし。一週間以内に告白する立つたらよし。」

それを聞いて納得。隼人。

「分かつた。鬼にはならない。その代わりその約束守つてよ。」
「こくんと、うなずく。

私、鬼と契約したんだ…。怖いよ。一週間で死ぬなんて…。

少しでも生きていきたいから私はあの日から一週間たつた日、自分が死ぬ日に隼人に告白することにした。

「…隼人？」

そういうと、隼人は姿を現した。

「…ゴメン。」

一週間ずっと悩んで書いた手紙を隼人に向かつて投げつける。そして猛ダッシュで逃げる。

「ちょ、待てよ…！」

後ろから隼人が追つてくるのが分かる。

これも…鬼ごっこなのかなあ？

鬼ごっここの期間も少なかつたなあ。一度くらい好きって言つてもらいたかつたな。。

走つていると後ろから隼人に追いつかれた。そして、思いつきり抱きつかれた。

「ちょ、隼人！？」

「すまん…。」

そういうつて、私の背中に激痛が走つた。

隼人が日菜を殺したのだ

。

向こうで声がする。

「鬼さんだあれ？」

「人が答える。

「はあやあと」

その声を聞けなかつた一人の幼女が、隼人という鬼につかまつた。
そしてまた誰かが聞く。

「鬼さんだあれ？」

すると、につこり笑つた幼女が笑みを浮かべて言つ。その手にはも
ちろん黒い本。
「ワタシダヨ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6137d/>

伝説の鬼ごっこ

2010年10月28日07時51分発行